*King Lear*におけるCordeliaと2人の姉たちの類似性及びその存在意義について

村上　世津子*

(平成28年10月31日受理)

Significance of Similarities between Cordelia and her Sisters in *King Lear*

Setsuko Murakami*

When we think about the character of Lear's three daughters, we usually think that Cordelia and her sisters are ways apart. We often think that Goneril and Regan are Machiavellian and monstrous, while Cordelia is a kind, quiet, and angelic figure. However, as Werner and other critics argue, close analysis of the text shows that Cordelia has much to do with her sisters: she is decisive, courageous, and aggressive. Nevertheless, her resemblance to her sisters does not testify to her being Machiavellian. On the contrary, the resemblance acts as a warning for an audience not to judge by appearance. It tells the audience that true love cannot be judged by words but by the action, by the sacrifice one offers.

Key words: Cordelia, Goneril, Regan

1. はじめに

*King Lear*の登場人物はDanby以来一般的にEdmundやGonerilら悪人とCordeliaやLearやEdgarら善人グループに分けて考えられてきた。GonerilやEdmundが私利を追及するために親子兄弟（姉妹）の絆を裁ち他者を犠牲にしていくMachiavelli的な冷酷な存在であるのに対してCordeliaやEdgarは親に勘当された後も親思いの優しい性格をしていて自らが引き起こしたのではなく他者から与えられた苦しみを苦しむ受動的な存在だと考えられてきた。EdgarとEdmundの性格の違いを理解するのは比較的容易である。EdgarとEdmundは兄弟とはいえ前者がGloucesterの嫡男であるのに対して後者は庶子，しかもEdmundは人格形成期に親や兄から離れて9年間も外国で暮らしまたすぐに外国に行く予定になっている："He hath been out nine years, and away he shall again。"(1. 1. 32-33)[1]。Edmundは庶子であるがゆえに"base"という烙印を押され世間の好奇の目にさらされる："Why brand they us with base? With baseness, bastardy?"(1. 2. 9-10)。*King Lear*の開幕場面はKentとGloucesterの会話で始まるがその会話の中でも

* 教養科准教授（英文学）

Gloucester は，庶子である Edmund を認知する時に赤面したことを告白する。それどころか Edmund の出生について "fault"(1.1.15)のにおいがするとさえ感じているのである。庶子であることで Edmund が被る被害は世間からの烙印にとどまらない。Edmund は "[should] Stand in the plague of custom"(1.2.3)しなければならないが Arden 注によればこれは，庶子は父の遺産の分け前にあずかれないことを意味する(Foakes 179)。自ら行動を起こさない限り遺産を手に入れることができない Edmund が実力で兄の権利をもぎ取ろうとするのは十分理解できる。

しかし Lear の 3 人の娘たちの性格の違いは話が別である。Lear の娘たちは母親も同じである："my daughters got 'tween the lawful sheets"(4.6.114)。なるほど Lear は Cordelia を一番かわいがっていた。開幕場面で娘たちの愛情テストをする時に Cordelia の番になると "What can you say to draw/ A third *more opulent* than your sisters?"(1. 1. 85-86，筆者強調)と聞くことには，より豊かな領土をお気に入りの娘に譲りたいという Lear の思惑がにじみ出ている。とは言え Cordelia の取り分も面積的には姉たちと同じ "a third"に過ぎない。そもそも Lear の愛情テストが公開テストの形を取っているのは領土分配が公平平等を旨とするものであることを列席者に訴えかけるためであるように思える。しかもそのテストで Cordelia が Lear の逆鱗に触れる答えをして勘当され，彼女の取り分まで 2 人の姉たちに分配される。Goneril と Regan が彼女たちの境遇に不満を持つ要素はないように思われる。愛情テストの顛末は Gloucester が Kent に Edmund の出生の秘密を打ち明けるのを Edmund が小耳にはさむ場面と出自がもたらす差別や偏見に対して Edmund が憤懣を抱き，その憤懣が彼に領土奪取の意思表明をさせる場面にはさまれている。この配置は Lear の 2 人の姉娘の境遇と Edmund の境遇の違いを鮮烈にする。

Lear にこれだけの恩を受けておきながら領土を手に入れると手の平を返して Lear の追い出し工作を図る冷酷無慈悲な姉たちと，Lear や姉たちつまり他者によって与えられた苦しみを一身に引き受け Lear のために命までも捨てる Cordelia の献身的な愛を比較する時に Kent と同様私たちも星の影響力にでも帰さない限り姉妹の性格の相違の説明がつかないと思う："The stars above us govern our conditions"(4.3.34)。姉娘たちと末娘の違いは何に由来するのだろうか。そのような疑問を頭の片隅に置いて *King Lear* に関する研究書を紐解くと Werner を代表とする批評家は，優しくて控えめで天使のような従来の Cordelia 観に挑戦し，軍服を着て France 軍を率い，Goneril や Regan と同様に "unruly" である Cordelia 観を提議している。[2]さらには Cohen らは Goneril や Regan が Britain の擁護者で Cordelia が侵入軍である France 側であることを考慮するなら，私たちがどちらの側に味方するべきなのかは容易に判断できないと指摘している(Cohen 129)。同様に Booth も *King Lear* においては何かが間違っている時に代替となるものもまた欠陥を抱えていることを指摘する(Booth 111)。これらの学説を考慮して *King Lear* を読み直すと Cordelia の行動と姉たちの行動が呼応していることに気づいた。この呼応は Cohen らが指摘するように *King Lear* における道徳観の揺らぎを示唆するのだろうか。本稿では Cordelia の行動と姉たちの行動の類似性及びその存在意義について考察したい。

2. Lear を嵐の吹きすさぶ戸外に追い出す姉と嵐を引きおこす Cordelia

2.1 領土分割

通常 Lear の愚かさは生前に領土を分割譲渡して引退することにあると考えられている。Belsey は，名前は土地や富や権力を表すから王国を譲渡して王権を保持できると考えるのは愚かだと断罪する(Belsey 94-95)。Boeher や De Sousa らは領土譲渡して "A king and no king"になることは臣下に実権を失った王を支える経済的負担を課すゆえに王と臣下の間に軋轢が生ずることを指摘する(Boeher 83, De Sousa 141)。また *King Lear* の登場人物たちも Lear が Cordelia の分まで Cornwall と Albany に分割譲渡すると宣言することに批判的である。Kent は Lear の宣言に反対して "Reserve thy state"(1.1.150)と言う。Lear が娘たちから冷遇されるのを見た時に Fool は次のように言う："If I gave them all my living, I'd keep my coxcombs myself"(1.4.106-107); "When thou clovest thy crown i'the middle and gav'st away both parts, thou bar'st thine ass on thy back o'er the dirt"(1.4.152-54)。しかし Kent も Gloucester も Lear が公開愛情テストの実施を宣言した時には反対しなかった。しかも彼らは Lear の領土分割案をあらかじめ承知していた："for qualities are so weighed that curiosity in neither can make choice of either's moiety"(1.1.5-6)。彼らが問題視しているのは領土を 2 分割して譲渡してしまうことであり，3 分割して 3 分の 1 が Cordelia に譲渡されるなら異論はないのである。Bergeron は Shakespeare の *King Lear* の主要な材源である *King Leir* と Shakespeare の *King Lear* の相違点の 1 つについて次のように述べている。すなはち *King Leir* では Cordella が父の寵愛を受けていることをかねてから不満に思っていた姉たちは Skalliger から Leir の計画を聞き出すと愛情テストに備えてあらかじめ Leir が聞きたいと思うスピーチを用意して練習する。姉たちのスピーチを聞いた Cordella は彼女たちの不誠実さに憤慨して "O, how I dow abhorre this flattery!"と言う。これらの箇所は Shakespeare では削除されているので姉たちの言葉の正しさを判断する仕事は読者や観客に委ねられ私たちは当面 Lear とともに彼女たちの言葉が正しいと想定する(Bergeron 91)。

Bergeron の指摘は若干の修正が必要で Shakespeare の中で Cordelia が姉たちの不誠実を非難する言葉は削除されているのではなくて場所が移動している。分け前を取り上げられ勘当を宣告された後で France 王とともに退場する前に Cordelia は姉たちに次のように言う："Time shall unfold what plighted cunning hides, / Who covert faults at last with shame derides"(1.1.282-83)。この移動は Cordelia は彼女の取り分まで姉たちに巻き上げられたと感じた時に初めて姉たちの誠実さを問題にすることを示す。彼女たちの不誠実を非難する Cordelia の言葉に反論して言う Goneril の台詞 "You have obedience scanted, / And well are worth the want that you have wanted"(1.1.280-81)は半面の真理をつく。面白いことには彼女たちの誠実さに疑義を投げかける発言を残して Cordelia が France 王とともに退場した直後に姉たちは次のような話をする：

Goneril : Siter, it is not a little I have to say of what most nearly appertains to us both. I think our father will hence tonight.

Regan : That's most certain, and with you.Next month with us.

Goneril : You see how full of changes his age is.The observation we have made of it hath not been little. He always loved our sister most, and with what poor judgement he hath now cast her off appears too grossly. (1.1.285-98)

Lear が王国を 2 分割して 2 人の姉娘たちに分け与えてしまうことは *King Lear* の中の善人と考えられている Cordelia や Kent や Fool にとって問題なだけではない。上記の引用は，不正な手段を用いて王の計画に関する情報を入手し甘言を弄して末娘の遺産取り分まで巻き上げる *King Leir* の 2 人の姉娘たちと異なり Shakespeare の Goneril と Regan は老王の世話と引き換えに Cordelia の取り分まで彼女たちに加配されることは必ずしも喜ばしいものではないと感じていることを示唆する。むしろ彼女たちは最愛の娘を勘当する Lear の愚かさが彼女たちに降りかかってきた時に彼女たちが被るであろう被害を懸念する。その後の展開を見ると彼女たちの懸念は杞憂でないことが判明する：

Here do you keep a hundred knights and squires,
Men so disordered,so debauched and bold,
That this our court,infected with their manners,
Shows like a riotous inn. (1.4.232-235)

そして従者の数を減らしてくれるように要請する。

Goneril や Regan の主張は完全に的外れなものではない。Goneril の不満が根拠を欠くものでないことは Oswald が Lear のことを "My lady's father"(1. 4. 77)と呼ぶこと一つまり Oswald が Lear よりも彼の主人である Goneril を重視すること一に腹を立てた Lear が舞台上で観客の眼前で Oswald を殴りつけることによって示唆される。同様に Regan と Cornwall の言い分にも理がないわけではない。Gloucester の城の外で Oswald と鉢合わせした Kent は Oswald が Goneril からの手紙を携えているというだけの理由で彼に剣を抜いて打ちかかる。Oswald の助けを求める叫びを聞いて登場した Cornwall がけんかになった理由を聞いても Kent はまともな答えをしないどころか Cornwall を侮辱するような台詞を口にする："I have seen better faces in my time/Than stands on any shoulder that I see/ Before me at this instant"(2.2.91-93)。観客の眼前で行われる Kent のこれら一連の行動もまた Lear の従者の乱暴狼藉を観客に印象付けるからである。

「善人」たちにとってだけでなく「悪人」たちにとっても Lear の領土 2 分割譲渡が問題を孕むものであるなら何故 Lear は忠臣 Kent の諫言を退け彼を追放に処してまで 2 分割するのだろうか。耄碌した Lear の判断力欠如に理由を求めることは容易である。しかし追放された Kent が変装して Lear の元に戻り従者として仕えたい旨を伝えるときに "You have that in your countenance which I would fain call master"(1.4.27-28)と言うことは

注目に値する。Kent はお世辞を言えない性質である："He cannot flatter"(2.2.96)。思ったことをそのまま口にするしか能のない "plain"(2.2.98)な男が領土を失った Lear が "authority"(1.4.30)を保持していると言うことは，私たちが Cordelia を勘当して彼女の取り分を 2 人の姉に分け与えてしまう Lear の裁定を耄碌として片づけてしまうことの危険性を警告する。それでは何故 Lear はそのような裁定を下したのか，次項ではその経緯を検討しよう。

2.2 Lear が Cordelia を勘当するに至る経緯

開幕場面で娘たちの愛情テストをするに先立って Lear は "Which of you shall we say doth love us most, /That we our largest bounty may extend/ Where nature doth with merit challenge?"(1.1.51-53)と言う。しかしこの言葉に反して Cordelia のテストをする段になると "What can you say to draw/ A third more opulent than your sisters?" と聞く。愛情テストは Goneril, Regan, Cordelia の順に行われる。2 人の姉娘のスピーチを聞いた後でまだ Lear が Cordelia にひそかに 1 番良い取り分を残していることは Lear が Goneril の "I do love you. . . No less than life. . . . "(1.1.54-58)という答えや Regan の "I profess/ Myself an enemy to all other joys . . . And find I am alone felicitate/ In your dear hignness' love"(1.1.72-76)という最大限の愛情表現に騙されず誰が一番彼を愛しているかを見抜いていることを示唆する。Lear には Cordelia の愛を見抜く賢明さがあるから Cordelia が Lear の意に沿わない返事をしても即刻彼女の取り分を姉たちに分配したりはしない。"Nothing, my lord"(1.1.87) という Cordelia の答えにまず "Nothing?"(1.1.88)と聞きなおし，Cordelia が "Nothing"(1.1.89)しか返さないと今度は "Nothing(無)"からは "nothing" しか生じないから言い直すように諭す。"Nothing" より若干ましになったとはいえ，Cordelia の答えはやはりそっけない："I love your majesty/ According to my bond, no more nor less"(1.1.92-93)。Cordelia の度重なる不満足な答えに腹を立てず Lear は財産分与で損をする可能性にはっきり言及して言葉を繕うように促す。Cordelia は彼女の考えをはっきりと説明するが，特にそのスピーチの後半部分—結婚後は Lear だけを愛するわけにはいかず Cordelia の愛は父と夫に二分されるという部分—は，Arden の注が指摘するように父王に対する挑戦と解釈されかねない危険をはらむ (Foakes 165)：

> Haply when I shall wed,
> That lord whose hand must take my plight shall carry
> Half my love with him, half my care and duty.
> Sure I shall never marry like my sisters
> To love my father all. (1.1.100-104)

それでも Lear は怒りを抑えて Cordelia に彼女の台詞は彼女の真情を表すものか確認する。

Cordelia がそうだと答えてもなお真意を念押しする： "So young and so untender?"(1.1.107)。Cordelia に何度も言葉を言い繕うように促し，それに失敗すると複数回にわたり彼女の真意をただし Cordelia の遺産取り分を守るための試みの万策が尽きた後で初めて Lear は怒りを爆発させる。

いったん怒りを爆発させると Lear は Kent の諫言に耳を貸さないどころか彼を追放に処する。命がけで諫言する臣下の誠意を Lear が理解できないはずはない："Let [the bow] fall rather"(1.1.145); "Answer my life my judgement"(1.1.152)。それに Cordelia の取り分を守ることは Lear の地位を守ることだという Kent の主張— "Reserve *thy* state"(1.1.150, 筆者強調)—はまさに Lear の考えていたことと合致する："I loved her most, and thought to set my rest/ On her kind nursery"(1.1.124-25)。Lear の怒りの激しさの大きな部分が彼の分身と思い全幅の信頼を置いていた Cordelia に裏切られたという思いに由来することは言うまでもない。しかしそれだけが原因であったなら彼の老後生活の安定を確保するために Kent の忠告を受け入れたであろう。Cordelia を勘当し彼女の取り分を上の２人の娘に分け与える時に Lear は加配の代償に 100 人の騎士保持を含めた Lear の扶養を条件づける。Cordelia を含めて領土を３分割する計画を実行しようとしていた時には彼女に一番良い取り分を与えようとしたものの 100 人の騎士云々には一切言及しなかった。この違いはどこから来るのだろうか。Cordelia なら口に出して言わなくてもまた物質的な見返りを与えなくても「気持ち」一面積は同じだがより豊かな領土—だけで老後を託せる信頼があった。しかし上の２人の娘は物質的な見返りを与えても扶養を条件づけないと不安が残るのではないか。信頼の欠如の裏返しが上の２人の娘への領土加配とその代償としての扶養義務賦課ではないか。このように Lear 自身も不安を感じているなら何故 Kent の諫言に耳を貸さないのだろうか。

前言撤回を要求する Kent に Lear は次のように言う："thou hast sought to make us break our vows, / Which we durst never yet"(1.1.169-170)。王の言葉は法律も同然である。公開愛情テストを行いその成績に応じて領土を分配すると宣言しテストを実施した以上そのテスト結果に準拠した配分をしなければならないからである。彼自身の老後の安泰を優先して前言を撤回すれば王の威厳を傷つけるからである。なるほど Lear は引退して政治の表舞台から消えようとしている。しかし Lear は王の最後の仕事として公開愛情テストを行った以上，自己を危険に投げ入れることになろうとも結果責任を引き受けることによって王としての職責を果たしたいと思う。Lear は自己を危険に陥れる愚かさを犯すことと引き換えに王としての職務に忠実である賢明さを保持する。だから Kent は領土を失った Lear の中に "authority" を見出し Fool は Lear が "a great wheel runs down a hill"(2.2.261-262)であることを知りつつ彼に従うのである。

2.3 愛情テストの場面における Cordelia

ここで問題が生ずる。Cordelia を勘当する Lear の裁定が保身か職務に対する忠誠かの究極の選択の所産であるとしたら Lear にそのような選択を強いるのは誰かという問題である。Cordelia が愛情テストで色良い返事をしていたなら Lear がそのような選択を突き

つけられることはなかったであろうという疑問が残るのである。なるほど Cordelia には "glib and oily art"(1.1.226)が欠けている。しかし彼女は口下手ではない。彼女が勘当されたのは悪徳故ではないことを証言して欲しいという Cordelia の次の台詞はそれなりに雄弁である：

I yet beseech your majesty,
If for I want the glib and oily art
To speak and purpose not—since what I will intend,
I'll do't before I speak—that you make known
It is no vicious blot, murder, or foulness,
No chaste action or dishonoured step,
That hath deprived me of your grace and favour,
But even for want of that for which I am richer,
A still soliciting eye and such a tongue
That I am glad I have not—though not to have it
Hath lost me in your liking. (1.1.225-235)

テストの時の Cordelia の答えも編集して以下の部分だけを残せばそれなりに様になる：

I love your majesty according to my bond.
You have begot me, bred me, loved me. I
Return those duties back as are right fit,
Obey you, love you and most honour you. (1.1.92-93; 96-98)

領土を分け与えたいから Lear は Cordelia に何度も言い直させるのである。彼女が勘当されたのは悪徳故でないことを証言してほしいという時のスピーチをする能力があるなら上記のようなスピーチをするだけの能力を持ち合わせていると思われる。それなのにどうして Cordelia は Lear に挑戦するような答えしかしないのだろうか。姉たちが 100 人の騎士の扶養を賦課する Lear の要求に挑戦し彼を嵐の吹きすさぶ戸外に追い出すなら Cordelia は Lear の愛情テストに挑戦し彼に究極の選択を押し付けることによって嵐を作り出しているように思える。

観客に Cordelia と姉たちの類似性を認識させる仕掛けとして Shakespeare は Lear と姉娘たちの関係を断絶させるきっかけとなる言葉を Cordelia に言わせる：

Why have my sisters husbands, if they say
They love you *all*? Haply when I shall wed,
That lord whose hand must take my plight shall carry
Half my love with him, *half* my care and duty.

Sure I shall never marry like my sisters
To love my father *all*. (1.1.99-104,筆者強調)

Arden 注が指摘するように Cordelia の愛を丸ごと彼に捧げることを要求する Lear に半分しか差し出せないと主張する Cordelia の台詞は Lear と姉娘たちの間での騎士の数削減に関する駆け引きと呼応する(Foakes 165)。その駆け引きで姉たちが最初に提示する数は半減である："Dismissing half your train"(2.2.393)。そして愛情テストでの Cordelia の最初の答え "Nothing"は Lear と姉たちの交渉が決裂して Lear が嵐の中に出て行くきっかけとなる Regan の次の台詞と呼応する："What need one?"(2.2.452)

愛情テストの場面に限定するなら Lear の３人の娘の中で Lear の命令に従順なのは２人の姉たちの方である。しかし彼女たちが従順なのはそうすることが彼女たちの利にかなうからであって Lear のためを思ってのことではない。Fool は善人("the fool")と悪人("the wise man")の違いについて次のように述べる：

That sir which serves and seeks for gain,
And follows but for form,
Will pack when it begins to rain,
And leave thee in the storm; (2.2.267-72)

Cordelia に注いだ愛と異なり Lear が姉娘たちに注いだ「愛」は見かけ("form")に過ぎなかった。本物の愛を知らずに育った姉たちは本物の愛を差し出すことができない。彼女たちの従順は "form"に過ぎないからもはや利が得られなくなると本性を発揮して Lear の弱体化工作を始めるのである。反対に開幕の場面で Cordelia が手に負えないわがまま娘に見えるのは本物の愛を知っている Cordelia は Lear のためになるが彼が知りたくない真実を突きつけて不興を買うことを恐れないからである。

愛情テストが行われる時点で Cordelia は唯一未婚で Lear の元に残っている娘である。しかし彼女は結婚して Lear の元から出ていく瀬戸際にいる。Cordelia の求婚者の France と Burgandy が Lear に呼ばれるのに備えて待機している。愛情テストによる領土分配は Lear の遺産分けであると同時に結婚する Cordelia の持参金決定でもある。「父権制社会において，結婚とは，一般的に娘たちが自分と同等の価値とされる持参金をもって父から夫へと譲渡される儀式を指す」（山本 123）。当時の社会の decorum に照らせば嫁ぐことは夫の支配下に入ることである。嫁ぐ娘は "bond"(1.1.93)で規定された愛以上のものを父に差し出すことはできないのである。Lear は Cordelia に嫁いでも「父の娘」であり続けることを期待している。嫁ぐ以上 Cordelia は今までのような父娘関係を維持できない。しかし愛とは仲良し関係なのか。なるほどいつも傍らにいて相手を喜ばすことが愛なら嫁ぎ行く Cordelia には Lear を愛することができない。だから Cordelia は先に引用した台詞を口にする。 "half"と "all"を対比するその Cordelia の台詞はまた愛を定量化するという点において娘たちの愛の丈を測ろうとする Lear の思考様式と通底するように思える

(Booth 110)。しかし父に型を押されてこの世に生を受けた者としての親子の自然な絆—"bond"—は結婚後も残る。 bond に基づいた愛は子に，父が必要とする時に父の痛みを共に担うことを要求する。自然の情に基づいたこの愛は結婚後も変わることはない。父の言葉にあえて同様の言葉を返すことによって Cordelia は愛を定量化することの愚かしさを伝えようとするのである。

なるほど愛を丸ごと彼に捧げることを要求する Lear に半分しか差し出せないと主張する Cordelia の台詞は Lear と姉娘たちの間での騎士の数削減に関する駆け引きを想起する。しかし用語の類似に反して Cordelia と 2 人の姉たちが意図することは全く異なる。姉たちの "half"はセリの言葉である。Lear が 50 人の従者で折れる気配を察知すると 25 人，10 人，5 人と減らしていきついには，どうして 1 人でも必要なのかと聞くのである。それに対して Cordelia は "half"という挑発的な言葉を用いることによって愛を定量化する愚かさを突きつけるのである。"bond"に従って愛するというようなそっけない答えでは領土を分けてやれんと言っていた Lear が 2 人の姉が共謀して Lear の弱体化工作に取り組むのを見ると，まさにその "bond"に基づいた愛を要求する："Thou better knowst/ The offices of nature, *bond* of childhood. . . . "(2.2.366-68，筆者強調)。Lear の主張が姉たちの頑なさを崩すことができず従者の必要を問われた時に Lear は嵐の吹きすさぶ戸外に出て行く。

3. 姉たちの残酷さと Cordelia の残酷さ

3.1 Lear の武力保持

凄まじい嵐に打たれることが Lear を狂気に導くことは確かだが Lear が嵐の中に出て行くことと Gloucester が言うように(3. 6. 86)姉たちが Lear の命をつけ狙うこととは必ずしもイコールではない。Lear を追い出したことを咎める台詞を Albany が口にするとき時に Goneril は次のように言う：

> This man hath good counsel—a hundred knights!
> 'Tis politic, and safe, to let him keep
> At point a hundred knights! (1.4.315-17)

Goneril はもちろん皮肉として上記の台詞を言う。しかし Goneril の意図に反して上記の台詞は半面の真理を突く。Lear の愚かさを揶揄って Fool が "If I gave them all my living, I'd keep my coxcombs myself"(1.4.106-107)や "I am better than thou art now, I am a fool, thou art nothing"(1.4.184-85)と言うのを聞くから観客は領土を失った Lear には彼を支える力が何も残っていないような錯覚を抱かせられる。しかし Lear には 100 人の騎士の護衛がついている。Lear の従者たちは礼儀作法の面では Goneril の主張するような "disordered rabble"(1.4.247)かもしれないが軍事能力において Lear が主張するように "men of choice and rarest parts"(1.4.255)であるなら武力にものを言わせて Goneril に言うことを聞かせることができたはずである。しかし Lear はそのチャンスをフイにしても

う1人の娘に期待してReganのところに行く。

LearがReganのところに向かうとすぐにGoneril はReganに手紙を届けさせる。これはReganがLearと組むかGonerilと組むかで情勢が全く異なることを示唆する。Learには起死回生のチャンスが残されているのである。結局ReganがGonerilの側についてしまい2人で共謀してLearの軍隊を解体し怒ったLearはわずかな供回りのものを連れて嵐の中に出て行くわけだが，この時点でも，もしLearにその気があるなら起死回生を図ることができたであろう。

Cordeliaを勘当した後でLearはCordeliaの取り分について次のように言う："Cornwall and Albany, /With my two daughters' dowers, digest this third"(1.1.128-29)。Learが直に2人の娘にCordeliaの取り分をお前たちに分け与えると言わずに夫たちに言うのは，Shakespeareの時代の社会では結婚後は妻は経済的にも政治的にも夫の支配下に入るからである(Stallybrass, 127)。結婚指輪を差し出す時にPortiaが言う次の台詞はこの思想を端的に表現する：

> Myself, and what is mine, to you and yours
> Is now converted. But now I was the lord
> Of this fair mansion, master of my servants,
> Queen o'er myself; and even now, but now,
> This house, these servants, and this same myself
> Are yours, my lord's. (*Merchant of Venice*, 3.2.166-71)

なるほどGonerilはReganと手を組んだ。そしてReganの夫Cornwallは全面的にReganを支持している。しかしGonerilの夫Albanyは彼女の考え方を支持していない："I cannot be so partial, Goneril"(1.4.304); "Well, thou may fear too far"(1.4.321)。半面Albanyは事態を十分に理解していないのでLearとGonerilの間でどっちつかずの態度を取ることしかできない："My lord, I am guiltless as I am ignorant"(1.4.265)。GonerilとReganが共謀してLearの軍隊の解体を図った時にもしLearが少数の供回りのものだけを引き連れて嵐の中に出ていく代わりに100人の騎士を連れてAlbanyの城に戻りAlbanyに事情を説明し彼を味方につけていたなら事態は全く違った展開をしたであろう。Learが嵐の中に出て行った後でGonerilは" 'Tis his own blame; hath put himself from rest"(2.2.47)と言う。この言葉はGonerilの冷酷さを証明するとともにLearについても半面の真理を突く言葉である。Learには他の選択もできたのに嵐の中に出て行くことを選ぶからである。

Learは"Nothing will come of nothing"換言すれば"Something will come of something"だと信じてきた。愛は定量化できるものであり人は他者からモノをもらえばそれに見合うモノをお返しするべきであり，その逆も真だと信じてきた。庶子であるEdmundの認知が求められる度に赤面してきたと公言してはばからないGloucesterと異なりLearはGonerilとReganが"got 'tween the lawful sheets"であることを認め3人の娘に表面上は公平に遺産を分配するように配慮したし，Cordeliaを勘当した後は彼女の分

も 2 人の娘に分け与えた。父として娘たちに注げる愛は注ぎつくしてきたように思えるのにどうして娘たちは契約の履行—100 人の騎士を含めた Lear の扶養—さえしないで平気でいられるのかという疑問が Lear を苦しめる。この問いはそれまで Lear がよりどころにしてきた信条に根底から揺さぶりをかけるので Lear の頭の中は激しい嵐が吹きすさぶ。Lear が嵐の中に出ていくのは肉体も同等の嵐にさらすことによって彼自身の中に存在する嵐に抵抗し精神の均衡を保つためである。

3. 2 France 軍を率いる Cordelia

嵐の中に出て行くことを選択するのは Lear であるからその行為をもって姉たちが Lear の命を狙っているとまでは言えない。しかし Lear を支持する Cordelia 軍が England に上陸して以降の彼女たちの残虐さは話が別である。Lear を救出しようとする Gloucester は Cornwall と Regan に目をくり抜かれる。しかも Cornwall は Gloucester の片目がくり抜かれた後で命がけで止めに入った従者の諫言にも耳を貸さず Cornwall と従者の切りあいになる。従者は Cornwall を切りつけるものの Regan に背後から刺されて死ぬ。従者の願いもむなしく Gloucester は残った目も Cornwall にくり抜かれ彼の館から追い出される。そして従者の死は弔われないどころか Cornwall に肥溜めに捨てておくように命じられる。これら一連の行動は舞台上で観客の眼前で行われ Cornwall と Regan の残虐さが印象付けられる。また Britain 軍の最高責任者である Albany が France 軍との交戦を決意したのは France 軍の目的が Britain 侵略にあり Lear 支援にあるのではないと判断したからである: "For this business, / It touches us as France invades our land, / Not bolds the king"(5.1.24026)。にも拘わらず Albany を片付けて Britain の支配者になることを企む Edmund は人民の気持ちが Lear と Cordelia に向かうのを阻止するために隊長に Lear と Cordelia を殺すように命じる。そして Goneril と Regan はそのような冷血な Edmund に惹かれて Edmund の取り合いをする。Regan は後家の立場を利用して Goneril の欲望を牽制し，Goneril は一方では妹に Edmund を取られないように Regan に毒を盛り，他方では重婚の妨げとなる夫の暗殺を考える。とは言えこれらをもって Cordelia の優しさと姉たちの残酷さを即断できるほど *King Lear* は単純ではない。

Gloucester の目がくり抜かれるのは彼が France 軍に通じていたことが発覚し証拠も挙がったからである。Lear を救出するために彼の直属の主人である Cornwall を裏切ったからである。しかも Oxford の注が指摘するように "I would not see thy cruel nails/ Pluck out his poor old eyes"(3.7.55-56)という Gloucester の台詞は実質的に彼の拷問を挑発する (Wells, 208)。Cornwall にも言い分があるのである。同様に Edmund が Cordelia と Lear の処刑を隊長に命じたことにも理がないわけではない。Britain に軍隊を侵攻させ戦争を仕掛けたのは France である。France 王が不在で実質上の France 軍のトップが Lear と Cordelia であるなら彼らに戦争責任を求めたい気持ちは十分理解できるものだからである。同様に Goneril が Albany に愛想をつかして Edmund に惹かれるのも納得できる面がある。自国を敵軍に侵略されても手を拱いているだけの夫よりも自国を守るために迅速に行動する Edmund の方が頼もしく思えるし国のためにもなるように思えるからである。

Cordelia は姉たちが Lear を嵐の中に追い出した冷酷さを次のように非難した：“Mine enemy's dog/ Though he had bit me should have stood that night/ Against my fire”(4.7.36-38)。この台詞は一般に Cordelia の優しさを伝える言葉だと解釈される。しかし愛情テストの場面の Cordelia の答えが示唆するように Cordelia を従順で優しい天使のような女性とのみ捉える見方には問題がある。England 軍がこちらに向かってくるという報告を受けた時に Cordelia は次のように言う：

> 'Tis known before. Our preparation stands
> In expectation of them. O dear father,
> It is thy business that I go about;
> Therefore great France
> My mourning and important tears hath pitied.
> No blown ambition doth our arms incite,
> But love, dear love, and our aged father's right (4.4.22-28)

上の引用は観客に以下の３点を伝える。すなはち(1)France 軍の England 侵攻の原因は Cordelia にある。(2)Cordelia は France 軍のことを “our arms”と呼んでいる。(3)France 王不在時には Cordelia が England 軍の動静に関する報告を受ける立場にある。なるほどフランス軍侵攻の知らせに即応できない夫の優柔不断に苛立った Goneril は次のように言う：“I must change names at home and give the distaff/ Into my husband's hands”(4.2.17-18)。しかも Edmund に心惹かれる Goneril は彼と結ばれるために夫の殺害を画策する：“and his bed my gaol, from the loathed warmth whereof, deliver me and supply the place for your labour”(4.6.261-63)。Goneril のこれら一連の行動は彼女が decorum を逸脱した monstrous な存在であることを示す。しかし England に軍隊を侵攻させ England 軍と戦火を交えようとすることは Cordelia が Goneril や Regan 殺害を図ることに等しい。Cordelia は Goneril 以上に “decorum”を逸脱し Goneril を凌ぐ酷薄さも併せ持つように思われる。

にもかかわらず酷薄な Cordelia 像が，観客が *King Lear* を通して得るイメージとかけ離れているのは，Cordelia の軍隊が England に侵攻するのは野心とは無縁だからである：“No blown ambition doth our arms incit, / But love, dear love, and our aged father's right”(4.4.27-28)。引退を表明して領土を分配したとは言え Albany も Cornwall も即位していない以上 Lear は王としてとどまり続けている。Regan に Lear を Dover に連れて行った理由を問い詰められた時に Gloucester は “nor thy fierce sister/ In his anointed flesh stick boarish fangs”(3.7.56-57)と答える。Hassel によれば Shakespeare の時代において聖油を塗られて即位するということは地上における神の代理人だと考えられた。よって “anointed king”に対して謀反を企てることは神に対する謀反だと考えられた(Hassel 18-19)。England に侵攻されても Albany がなかなか France 軍と対戦する決断がつかないのは “anointed king”に歯向かうことは神に謀反を企てることだからである。Edmund

が，Lear と Cordelia が人民の心を惹きつけることを恐れるのも同様の理由からである：

> [Lear's] age had charms in it, whose title more,
> To pluck the common bosom on his side,
> And turn our impressed lances in our eyes
> Which do command them. With him I sent the queen,
> My reason all the same (5.3.49-53)

このように当時の観客の感覚では anointed king である Lear の権利を守るために Cordelia が England 軍と戦火を交えることは正しいことであった。

とは言え，もし Cordelia が Britain に軍隊を侵攻させたりしなければ Gloucester の目がくり抜かれることはなかったし，Gloucester の残った目を守ろうとした従者が Cornwall に殺されることもなかったし，さらには Cornwall が召使に殺されることもなかったであろう。そして Cornwall が生きていたなら 2 人の姉たちが Edmund の取り合いをして Goneril が Regan を殺して自殺するという結末も避けられたかもしれない。

3. 3 提示した内容と実際に提供できるものの落差

これだけ大きな犠牲を払って Cordelia が Lear のために提供することができたのは囚人としての地位である。従者の数をゼロにまで引き下げる提案をした時でも姉たちは Lear 個人は喜んで迎えるし姉たちの側で Lear につける従者を用意することを明言していた：

> What need you five and twenty? Ten? Or five?
> To follow in a house where twice so many
> Have a command to tend you? (2.2.449-51)

> For his particular, I'll receive him gladly,
> But not one follower. (2.2.481-82)

"aged father's right"を回復するという Cordelia の大義は立派であるが *King Leir* の Cordella と異なり実際に彼女が Lear に提供できたものは「人倫にもとる」姉たちが騎士の数削減交渉の終わりに提示したものに比べてはるかに劣るものである。愛情テストでの巧言と実際に提供し得るものの落差ゆえに姉たちが非難されるなら Cordelia が掲げた戦争の大義と実際に彼女が提供し得るものの落差はどうなるのかという問題が生じる。

この問題を考える鍵となるのは Lear の反応であろう。姉たちが騎士の必要性を問うた時に怒って嵐の中に出て行ったのと対照的に Cordelia 軍が負けて Lear と Cordelia が囚われの身となる時に Lear は彼の運命を従容と甘受する。姉たちの非道に対して復讐を誓ったのと対照的に Cordelia には許しを乞う：

I will have such revenges on you both
That all the world shall—I will do such things—
What they are yet I know not, but they shall be
The terrors of the earth! (2.2.468-71)

When thou dost ask me blessing, I'll kneel down
And ask of thee forgiveness. (5.3.10-11)

なるほど最初に提示したものと実際に提供し得るものの落差を基準にして娘たちの愛情を測れば Cordelia の方が悪いとまでは言えなくても 3 人の娘たちの間で優劣はつけ難い。しかしプロセスを考慮するなら彼らの違いは明白になる。姉たちが必要を問う行為は品物（領土）を受け取っておきながら代価（100 人の騎士を扶養する負担）を支払うことを拒否する詐欺行為である。それに対して Cordelia は品物を受け取っていないのに払える限りの代価を払う—Lear の権利回復のために姉たちに戦争を挑んで敗れてすべてを失う—からである。嵐に打たれることを通して Lear は，愛はお世辞を言って他者を一時的に喜ばせる行為でないことを学んだ："Go to, they are not men o'their words : they told me I was everything; 'tis a lie, I am not ague-proof."(4.6.103-4)。むしろ愛は他者の痛みを己が痛みとして感じることだと学んだから Fool に思いやりのある言葉をかけるのである： "How dost my boy? Art cold?"(3.3.68); "Poor fool and knave, I have one part in my heart/ That's sorry yet for thee"(3.2.72-73)。そして宮中では見向きもしなかった卑しい藁が嵐の中では貴重なものに変わることを体得したから Lear のためにすべてを失った Cordelia が Lear に提供する囚人としての暮らしが 100 人の騎士を剥奪されて姉娘たちの城で厄介者として暮らすよりもはるかに素晴らしく感じられるのである。

4. Cordelia の死と姉たちの死

4.1 Cordelia の死と姉たちの死

戦争に敗れた Cordelia が失うのは名誉と地位と財産だけではない。Cordelia は Edmund の命令を受けた隊長に獄中で殺される。ヨハネの福音書 15 章 13 節は「人がその友のために命を捨てるという，これよりも大きな愛はだれも持っていません」と記している。Lear のために命をも捨てた Cordelia はまさに愛のシンボルということができる。ここで最大の問題が残っていることに気づく。Lear のために命まで失うが故に Cordelia が愛のシンボルになるなら Edmund のために命を失う Goneril と Regan はどうなのかという疑問である。夫が存在する Goneril と未亡人の Regan では立場が異なるので 2 人を分けて考えたい。

King Lear の背景となる世界は異教徒の世界ではあるが，その考え方は Shakespeare の時代の考え方—イギリス国教会の考え方—の影響を強く受けている。キリスト教においては結婚する時に新郎新婦は互いにパートナーとなる人だけを終生愛し続けることを誓う： "love him[/her], comfort him[/her], honor and keep him[/her] in sickness and in health;

and, forsaking all others keep you only unto him as long as both shall live"(*Book of Common Prayer*, 291)。Albany と結婚している Goneril は彼が存命中は彼のみを愛さなくてはならない。夫以外の男性を思慕することは，たといそれが純粋に相手を思う気持ちに由来するにしても十戒で禁止されている罪の 1 つである姦淫と見なされた。この考え方に基づけば Goneril が Edmund に寄せる思いは，愛ではなくて欲情であり姦淫である。しかも彼女は自分が思慕する Edmund が妹と結ばれるのを阻止するために Regan を殺す。殺人はもちろん十戒で禁止されている大罪の 1 つである（『聖書辞典』「十戒」）。さらには彼女の死は Edmund のために命を捧げたものではない。Edmund と結ばれるために夫を殺そうとした陰謀がばれて自暴自棄になり自殺したのである。自暴自棄による自殺は神の救いの能力を見限ること，つまり神の権威に対する挑戦に該当するので罪だと考えられた。

Regan の場合は未亡人であるから彼女が Edmund に寄せる打算的でない思いは愛と呼ばれる資格を持ち得るように思える。しかし Albany が冗談めかして言うように Edmund はすでに Goneril と婚約しているから Regan の Edmund に対する思慕は横恋慕に過ぎない：

> For your claim, fair sister,
> I bar it in the interest of my wife :
> 'Tis she is sub-contracted to this lord
> And I her husband contradict your banns (5.3.84-88)

また Regan の死は Edmund のために命を捧げたことによるのではなくて恋敵である姉に毒殺されたものであるから彼女も愛のシンボルとは言えない。Cordelia の死との以上のような違いを指摘した上で，もし Edmund に心を寄せていなかったならば姉たちが死ぬことはなかったであろうことも認めなくてはならない：

> Edmund : Yet Edmund was beloved :
> The one the other poisoned for my sake,
> And after slew herself.
> Albany : Even so; (5.3.238-40)

Kahn が指摘するように愛を知らなかったから悪の道を突き進んだ Edmund は愛を知った時に少しばかりの善行をしたいと思う(Kahn 51)：“Some good I mean to do, / Despite of mine own nature. ”(5.3.241-42)。それが愛という名に値するかどうかについて疑問が残るにしても，姉たちの Edmund への思いは頑なな Edmund の心をほぐすのに役立った。

4.2 Cordelia の死

ここで Cordelia の死を振り返ってみよう。Cordelia の死は Johnson 博士を初めとして

多くの観客や読者が *King Lear* について考える時の躓きになってきた。何故愛のシンボルが死ななければならないのか，嵐に打たれることを通して自己の愚かさを知り Cordelia と和解した Lear が結局は絶望のうちに死ぬなら *King Lear* の世界は不条理の世界なのかという問いに悩まされてきた。Bradley を代表とする批評家たちは "joy and grief"(5. 3. 197)の両極端の感情に心臓が引き裂かれて死んだ Gloucester の死に方からの類推で Lear も Cordelia が生きていると思う喜びのうちに死ぬと考える：「Lear の最後の口調や仕草や顔つきの中に耐えがたいほど強い喜び(unbearable *joy*)を表現しようと試みない役者はテキストに忠実でない」(Bradley 291)。しかし Bradley 自身が気づいているように Gloucester の死と Lear の死の間には大きな違いがある。Edgar が実際に生きているのに対して Cordelia が生きていると思うのは Lear の錯覚に過ぎないからである。

一方 Cavell や Quilligan は Cordelia と Lear の愛は近親相姦であるがゆえに Cordelia はその罰として死ぬと指摘する(Cavell 85; Quilligan 228)。近親相姦が疑われる主な理由は次の 2 つである。まず France 軍の England 侵攻を指揮するのが Cordelia であり France 王は帰国している："Why the king of France is so suddenly gone back"(4.3.1)。つまり夫である France 王か父である Lear かの選択において Cordelia は父を選んだ。次に England 軍に敗れ囚われの身になった時の Lear の台詞には落胆や失望というよりもむしろ Cordelia と 2 人切りでいられることに対する淫靡な喜びが感じられ "sacrifices"(5.3.20)という語の使用は，彼らの行為が神の罰を受けるに値することを示唆しているように思えるというものである。前者については France 王が参戦することにより外国軍による England 侵略という図式になるのを避けたのが大きな理由であろう。また聖書には次のように記されている：「あなたがたのうちに羊を 100 匹持っている人がいてそのうちの 1 匹をなくしたら，その人は 99 匹を野原に残していなくなった 1 匹を見つけるまで捜し歩かないでしょうか」(ルカの福音書 15 章 4 節)。Cordelia にとって Lear は迷える 1 匹の子羊であり France 王は安全な場所にいる 99 匹である。だから France 王帰国後も彼女自らが軍隊を率いて Lear 救出に乗り出すのである。しかも本稿の「2. 2 France 軍を率いる Cordelia」の項で触れたように France 王は Cordelia の行動に賛成し支援している。また後者については 2 人切りでいられることの淫靡な喜びどころか次の Cordelia の台詞は敗れてなお闘志盛んで姉たちに対する敵対心を失っていないことを示す："For thee, oppressed king, I am cast down;/ Myseslf could else outfrown false fortune's frown./ Shall we not see these daughters and these sisters?"(5.3.5-7)。

それではやはり Cordelia の死は *King Lear* が不条理劇であることを示唆するのだろうか。早急に結論づける前に Cordelia を抱いて登場する Lear が pieta 像を連想させることを思い出したい。この点に関して Barber は次のように述べている：「・・・Cordelia を抱く Lear の姿の中には 1 種の epiphany が存在する。それは神聖なものではなく人間的なものであり，それが神聖なものに向かうと同時に破滅に向かう時の崇高さと恐ろしさの提示である」(Barber 119)。Cordelia は人間だから死んで 3 日後に蘇ることはできない。彼女の死は必然的に破滅を意味する。しかし Cordelia を抱いた Lear の姿が pieta 像を想起することは彼女の死が神聖で崇高なものだという感覚を読者や観客に伝える。そしてこの

感覚は Shakespeare が *King Lear* で不条理や虚無の世界を提示しようとしたとする考え方を退ける。なるほど Cordelia が獄中で殺されることは彼女が Lear の権利回復はもとより囚人としての地位確保すらままならなかったことを意味する。世俗的な意味では Cordelia は Lear に何も差し出すことができなかった。しかし死して文字通り "nothing" になるのは Cordelia が Lear のために彼女自身の命を含めてすべてを差し出した結果である。"Nothing"こそが "All"であるが，Cordelia の愛を丸ごと手に入れた時に Cordelia は死んで Lear の元にとどまることができない。その重さを受け止められないから Lear は Cordelia の中に生命の兆しを見出そうとするのである。「私たちは最愛の者をなくした時に時としてそんなにも貴重なものが本当に完全に永遠になくなってしまうことなどありえないと感じるから」(Nohrnberg 166)Lear は Cordelia が生きていると思うのである。

姉たちの死は Edmund の頑なな心をほぐしたものの，その死は悼まれない："This judgement of the heavens that make us tremble/ Touches us not with pity"(5.3.230-31)。それに反して Lear の腕に抱えられて登場する Cordelia の死は Lear だけでなく観客の胸をも引き裂く。Cordelia の死はまさにその痛ましさによって裏切りや不信に満ちた Lear の世界にも真実の愛が存在したことを証明するのである。

5. 結び

Lear の 3 人の娘たちの性格は一般的に上の 2 人，特に Goneril は Machiavelli 的な monstrous な女性であるのに対して Cordelia は物静かで優しい受動的な女性というイメージで捉えられてきた。しかし Werner 他の批評家が主張するようにそのようないわゆる「女性らしい女性」というイメージに反して Cordelia は決断力と行動力と豪胆さを併せ持つ女性である。テキストを詳細に検討すると彼女の行動は姉たちの行動と呼応し，時として姉たちを凌ぐ豪胆さをも示すことがわかる。しかし彼女と姉たちの行動の類似性は Cordelia も姉たちと同様利己的な女性だということを証明するものではない。むしろその類似性は観客に外観で判断することの危険性を警告する，換言するならばそれは，愛が一時的に他者を喜ばせる行為ではなく，他者のために苦しみを引き受ける行為であることを考えさせる縁(よすが)になると言えるだろう。

注

1. テキストは Shakespeare, William. *King Lear*. 1997. Ed. R. A. Foakes. London : Bloomsbury, 2015. を使用した。
2. ただし Werner は劇の終わりで Cordelia が Lear の元に戻ることは彼女が結局家父長的な思考を持つことを示すと述べる。

引用参考文献

Barber, C. L. "On Christianity and the Family : Tragedy of the Sacred. "*Archetypal Patterns in Poetry.* Ed. Maud Bodkin. Oxford: Oxford UP, 1934. 15-16. Rpt. in *Twentieth Century Interpretaions of King Lear : A Collection of Critical Essays.* Ed. Janet Adelman. Englewood Cliffs : Pretice-Hall, 1978. 117-120.

Belsey, Catherine. "*King Lear* and the Missing Salt. " *Why Shakespeare?* Basingstoke : Palgrave, 2007. 42-64. Rpt. in *Shakespearean Criticism.* Ed. Michelle Lee. Vol. 138. Detroit : Gale, 2011. 89-99.

Bergeron, David M. "Deadly Letters in *King Lear.* " *Philological Quarterly* 72, no. 2 (spring 1993): 157-76. Rpt. in *Shakespearean Criticism.* Ed. Michelle Lee. Vol. 130. Detroit : Gale, 2010. 89-98.

Boehrer, Bruce Thomas. "*King Lear* and the Royal Progress : Social Display in Shakespearean Tragedy. " *Renaissance Drama* 21 (1990) : 243-61. Rpt. in *Shakespearean Criticism.* Ed. Michelle Lee. Vol. 130. Detroit: Gale, 2010. 81-89.

Booth, Stephen. "On the Greatness of *King Lear.* " *Twentieth Century Interpretations of King Lear*: *A Collection of Critical Essays.* Ed. Janet Adelman. Englewood Cliffs : Prentice-Hall, 1978. 98-111.

Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy : Lectures on Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth.* 1904. London : Macmillan, 1951.

Cavell, Stanley. "The Avoidance of Love. " *Must We Mean What We Say?* Cambridge : Cambridge UP, 1976. 272-86, 288-90, 296-300. Rpt. in *Twentieth Century Interpretations of King Lear : A Collection of Critical Essays.* Ed. Janet Adelman. Englewood Cliffs : Prentice-Hall, 1978. 70-87.

Church of England. *The Book of Common Prayer 1559 : The Elizabethan Prayer Book.* Ed. John E. Booty. Charlottesville : U of Virginia P, 1976.

Cohen, Derek. "The Malignant Scapegoats of *King Lear.* " *Studies in English Literature 1500-1900* 49. No. 2 (spring 2009) : 371-89. Rpt. in *Shakespearean Criticism.* Ed. Michelle Lee. Vol. 138. Detroit : Gale, 2011. 125-33.

De Sousa, Geraldo U. "The Vanishing Castle in *King Lear.* " *At Home in Shakespeare's Tragedies.* Surrey : Ashgate, 2010. 23-63. Rpt. in *Shakespearean Criticism.* Ed. Michelle Lee. Vol. 148. Detroit : Gale, 2013. 129-54.

Foakes, R. A. , ed. *King Lear.* By Wiliam Shakespeare. 1997. London: Bloomsbury, 2015.

Hassel, R. Chris, Jr. "Anointed. " *Shakespeare's Religious Language : A Dictionary.* London : Thoemmes, 2005.

Kahn, Coppelia. "The Absent Mother in *King Lear.* " *Reuniting the Renaissance : The*

Discourses of Sexual Difference in Early Modern Europe. Ed. Margaret W. Ferguson, et al. Chicago : U of Chicago P, 1986.

日本聖書刊行会，「ヨハネの福音書」『聖書』新改訳，1973 年，1996 年.

Nohrnberg, James. "About Suffering and on Dying : Shakespeare's Reinvention of a Theater of Eschatological Identity in *King Lear*. " *Essays in Memory of Richard Helgerson : Helgerson : Laureations*. Ed. Roze Hentschell and Kathy Lavezzo. Newark: U of Delaware P, 2012. 111-41. Rpt. in *Shakespearean Criticism*. Ed. Michelle Lee. Vol. 163. Detroit : Gale, 2015. 158-73.

Quilligan, Maureen. *Incest and Agency in Elizabeth's England*. Philadelphia : U of Pennsylvania P, 2005.

Shakespeare, William. *King Lear*. 1997. Ed. R. A. Foakes. London: Bloomsbury, 2015.

---. *The Merchant of Venice*. Ed. M. M. Mahood. Cambridge : Cambridge UP, 1989.

新教出版社編，「十戒」『聖書辞典』，1968 年，1996 年.

Stallybrass, Peter. "Patriarchal Territories : The Body Enclosed. " *Rewriting the Renaissance*. Ed. Margret W. Ferguson et al. Chicago: U of Chicago P. 1986. 123-44.

Wells, Stanley, ed. *The History of King Lear*. 2000. By William Shakespeare. Oxford: Oxford UP, 2008.

Werner, Sarah. "Arming Cordelia : Character and Performance. " *Shakespeare and Character : Theory, History, Performance, and Theatrical Persons*. Ed. Paul Yachnin and Jessica Slights. Basingstoke : Palgrave, 2009. 232-49.

山本真司：『<<シェイクスピア>>と近代日本の図像文化学：エンブレム，ジェンダー，帝国』，金星堂，2016 年.